

なぜ無謀なあの戦争をしたのか？

副題： 人材論、組織論等からなぜ失敗をしたのか

学校で習わない日本の近代史 なぜ戦争は起こるのか

横内則之 文芸社 2010

なぜ戦争は起こるのか

1. 明治の改革

近代国家として力をつけてきた日本が、発展方向を大陸に求め、半周遅れで帝国主義の間入り

2. 国民国家

封建時代： 国は領主が中心 住民は領主に従属

近代国家： 国民は基本的には民族を中心とした国家に従属

国家の概念： A 統治機構 Government/State： 国家体制、国家権力、国対地方
国民から付託された機関

B 祖国 Country：領土（郷土の集合体）、国民（家族の集合体）、文化（風俗、習慣、秩序の集合体）

3. 戦争の根源

単純化すれば： 生きるための縄張り（領土）の防衛、食の確保

現代は： 「安全保障」： 領土、生命 財産 文化 「食」：食料、資源、市場

戦争の主たる根源： 「安全保障と食」の確保 「国益」のぶつかり合い

4. 日本の近代を振り返って

{安全保障}

日清日露戦争： ロシアの脅威を未然に防止 朝鮮、満州は日本の「利益線」、ほっておけばロシアの植民地化危険性、独立も危うい

第一次世界大戦： タナボタの戦争： 帝国主義的野心を持つ

満州事変： 当時の状況からは自衛（抗日、侮日運動や対ソ対米戦への対応）と侵略が相半ば、満州国建国、五族協和、王道楽土の理想郷

日中戦争： 大東亜共栄圏、東亜新秩序、防共と言っても、例え引き込まれたのでも侵略戦争

太平洋戦争：南方への進出が直接誘因だが日本の遅れてきた帝国主義と米国の覇権主義の戦い：日本の責任 近衛首相、広田外相

「食の確保」

明治維新時：3千万 昭和の動乱期：7千万 倍以上 世界恐慌、金融恐慌のなか活路を満州、朝鮮、中国へ求めざるを得なかった

国民は墮落した政党ではなく陸軍に期待した

5. 国家の正義

国家の成り立ち、価値観、生存条件等 夫々の国ごとに異なる

個人間には 統一国家の下での法律、道徳、規範がある

国家間では国際条約の最低ルール ガイドライン 国益が優先される

失敗の本質

昭和天皇独白録

1. 兵法の研究が不十分であったこと。すなわち孫子の「敵を知り己を知らば百戦危うからず」という根本原理を体得していなかったこと。
2. あまりに精神に重きを置きすぎて、科学の力を軽視したこと。
3. 陸・海軍の不一致。
4. 常識ある首脳者の存在しなかったこと。往年の山縣、大山、山本という大人物に欠け、政戦両略の不十分の点が多く、かつ。軍首脳者の多くは専門家であって部下の統率の力量に欠け、いわゆる下克上の状態を招いたこと。軍人が跋扈して大局を考えず、進むを知って退くことを知らなかったこと。
このほか日独の利害関係の不一致も日本の敗因として挙げている。

国の仕組みの問題

- a. 明治憲法の持つ欠陥で、天皇主権でありながら立憲君主制 天皇は「君臨すれども統治せず」 政府は輔弼、軍部は輔翼言うことで政治・軍事を壟断できる
- b. 統帥部（陸軍参謀本部・海軍軍令部）が天皇に直結し、戦争は政治の一手段にも拘らず統帥権が政府より独立
陸海軍大臣現役制により軍部は大臣を出さない、辞任させることで、意に染まぬ内閣を阻止、瓦解させることができた。
米国憲法は起草時より軍士官学校生に文民統制を叩き込む
- c. 組織・人事問題： 陸軍・海軍が不仲で 予算の取り合いや統合機能が欠如したため統一した作戦が取れなかった
- d. 理念 哲学の問題： 島国の為、異民族との接触機会が少なく、付き合い方も未熟
：古来少数民族が大帝国を築いた例は多いが、
統治：外交、軍事、徴税権は独占するも、有能な人材の登用、他民族の言語、宗教、文化に寛容、統治される者の（租税公課）負担に納得性がある
安全保障、治安、インフラ、教育、制度、文化に恩恵があった
- e. 戦略・戦術のまずさ 詳細は後段へ
- f. 国民 民度の問題： 日本人は流動性の少ない村社会： 仕来りの尊重、争いを避ける 個人主義が育たなかった為国民の監視がない： 政党政治の未熟さと軍部の独走を生む

2. 転落の歴史に何を見るのか

奉天会戦からノモハン事件へ

斎藤健 ちくま新書 2002

3. ロシア、ソ連を敵として戦った例：時間軸で見た変化

A 奉天会戦：

1905(M38) 当時世界最強 ロシア陸軍(31万)に日本陸軍(25万)が辛勝
総合的な戦略構想

- a. 練度の高い海軍との統合的運用
- b. 情報重視の戦術発想
- c. 最高水準の武器へのこだわり
- d. 背後攪乱の為ロシア革命支援活動(明石大佐 国家予算0.4%使用)
- e. 終戦を意識して米国大統領ルーズベルトへの働きかけ
- f. 国際市場での多額の戦費調達

B. ノモハン事件*

1939.5 満州西北部ハルハ河での満州国関東軍と蒙古軍(ソ連軍)国境紛争
参謀本部の不拡大方針にも拘らず辻正信少佐(陸軍士官学校36期首席、陸軍大学校 43
期恩賜)等

による関東軍の独走

- a. リアリズム無き全体戦略
- b. 情報軽視, 兵站の悪さ
- c. 機械・技術の軽視
- d. 白兵銃剣主義への過度のこだわり
- e. 東京と現地との意思疎通の悪さ

結果として18000名が亡くなる戦いであった。

C. この34年間の間に起こったこと「変化」

1931(満州事変 : 日露戦争で獲得した満州権益の延長 当時国際環境の帝国主義全盛

1937以降 日華事変: 中国との本格的戦争

統帥権の独立: 天皇直結で内閣総理大臣でも口をはさめない

「人材編」

a. 生来のジェネラリストが消える：

日露戦争終結時(1905)における明治の大立者,元勳の当時の年齢

伊藤博文: 長州藩出身 初代内閣総理大臣、明治兼法の生みの親 64歳

井上薫: 長州藩からの伊藤の盟友、重要閣僚経験、財界の大御所 69歳

大山巖: 西郷隆盛の従弟で近代陸軍創設者 初代元帥 62歳

桂太郎: 長州藩出身 三度内閣総理大臣経験 57歳

児玉源太郎: 徳山藩出身 屈指の戦術家 53歳

山県有朋: 長州藩出身 日本陸軍最高権力者 元帥 二度 内閣総理大臣経験 67歳
1922没

彼らの特徴：武士の最後系譜の存在で政治、経済、社会、教育、科学等の様々な面の責任を有する

ジェネラリストの統治者、政治家

彼らは幼少時から史記等中国の歴史書が教科書で指導者としての研鑽を積んでいた

軍事は全体戦略の一手段で、軍事に全体戦略が振り回されない

日露戦争時の政略優先の例：桂首相、寺内陸相の統帥部大本営設置に関する対立を押し切る

海軍大臣 山本権兵衛の藩閥順送り人事から、海軍統制に忠実な東郷平八郎の連合艦隊司令長官抜擢適材適所

秋山真之 作戦参謀

b. 軍事は陸軍大学校、陸軍士官学校、海軍大学校、海軍兵学校 専門教育を受けた軍事エリートの台頭

文民統制シビリアンコントロール（政略優先）その後統帥権独立に組みふされてゆく

新世代の台頭：1907（M40）帝国国防方針策定が田中義一中佐 児玉の参謀 陸軍士官学校、陸軍大学8期の委ねられた（後 26代首相 陸軍大将）

軍令による軍政支配がはじまる： 陸軍大学校は参謀教育機関で天皇の統帥を補佐：軍政を政府に属する陸軍省が担当も、軍務局長を陸大出身者が就任

陸軍大学校、陸軍士官学校、海軍大学校、海軍兵学校の教育実態

- i. 政治、政略に関する教育はほとんどされなかった：将師にとっては政治と軍事が如何にあるかが必須
- ii. 戦略、戦術も過去の実戦教訓に基づく用兵技術論が主体で、近代戦争の指導への知識、能力養成は不十分

元勳達の影響力が落ちる

1912 西園寺公望内閣 軍拡急先鋒 田中軍務局長らに押され上原陸相辞任：山県動くも後継陸相を得られず内閣総辞職

1914 第一次世界大戦への参戦：慣例であった元老外交文書の閲覧を大隈内閣の政党内相 加藤高明がしなかった

1922（T11）山県有朋 軍事の政略優位の重要性を認識していた元老 死去
残る 西園寺公望、松方正義は軍部への影響力無し

元老に代わり軍人指導層に対峙した政党

1901-13 桂園時代： 山県閥 桂太郎と政友会 西園寺公望が交代で政権を担当

1913 大正政変：民衆の暴動で政権が倒れる

尾崎行雄、犬養剛、大隈重信、原敬等の大物政党人が活躍 田中義一すら立件政友会入り

桂太郎も立憲同志会設立へ：政党政治の強大化

1918（T7） 藩閥によらない原敬政友会内閣誕生：中国内政不干涉 英米 協調主義：

潜在能力の違い認識

陸相の田中義一も参謀本部策定の（日中、日米戦争も辞さず）シベリア作戦を否決

高等教育充実、産業通商貿易の振興 交通整備、国防強化、選挙権の拡大（15 円- 3 円）普通選挙は時期尚早

1921 原敬 東京駅で右翼により暗殺： if 軍部跋扈は止められたかも

1924 普通選挙法案 可決 加藤高明 護憲 3 派内閣誕生後 政友会、民政党（憲政会）の 2 大政党による 6 代 7 年の政権交代

露骨な党派活動と一連の汚職、金融恐慌や中国情勢に的確に対応できず 1,920 代で終わる

ジェネラリストを失った

1921 原敬（享年 65 歳）の暗殺で政党政治家達からもジェネラリストを失い、翌年山県死去

1922 大隈重信 鍋島藩士 若い時砲術、築城を学び、蘭学、英学も学び、学制、財政、軍制改革を目指すが脱藩、明治草創期に

大蔵大輔になり、上記改革に実績を上げ、2 度首相、外相時代に交渉力を発揮 89 年テロにも会い、立憲改進黨設立

東京専門学校（早稲田大学創設）ジェネラリストとして亡くなる

日本流ノーブレス オブリージュ

日本陸軍参謀教育者 独人メッケルは日露戦争の勝利：崇高な武士道精神 道德律

1889 新渡戸稲造（38 歳）「武士道」を英語で発表 日本人のことを知ってもらいたいとの意志

日露戦争前から明治に入って、この道德律が薄れてゆき喪失、新しいものが生み出されていない 工部学校長 英人ヘンリー ダイアー指摘

この時代の人間（軍人）の判断の欠点

激動の時代で中国、欧州情勢もめまぐるしく変化した： ただ一直線に破滅へ身かったのでは無い

1921 ワシントン海軍軍縮会議の際、加藤友三郎海軍大臣 反対が多い中、軍縮の主張した、健全な指導力、判断も努力はされた

1. 見通しの甘さと希望的観測をしがち： 例：脆弱な根拠による英、米の分断、中国は一撃でおとなしく成る、独は英を屈服させる
2. 一度権威となった「何々主義」を無批判に信じる： 海軍 大艦巨砲主義、陸軍 白兵銃剣主義
3. 当時健全な代替案が存在するにも関わらず、抵抗が弱かった：1935 敵の物質的威力軽視の風潮に対し異論 永田鉄山軍務局長 惨殺

危機になれば人材は出てくるか： 人材は自然に出てくるものではなく意図して作り上

げるものではないか

「日本人と組織論」

この 34 年間に起こった事： 様々な問題点を露呈して滅亡へ向かった日本人組織の壮大な実験場

合理性か、仲間意識か

軍隊は本来最も合理性を要求される組織にも拘らず、実際には人間関係を優先させる心理が強く働いた：明治の元勳がいた時は制御された

国際比較：例 捕虜収容所：

フィリピン マニラ捕虜収容所 英米人：自主的に自分たち内部管理組織を作る

モスクワ機構捕虜収容所： 日本人 ソ連の政治教育に感化 インターナショナルを歌い 連日 10 時間労働を自主的に行う 村八分

ドイツ人 確固たる信念と不屈の闘志で赤化教育染まらず 同盟国ながら離反

日本的集団主義とボス

日本の集団主義： 個人の存在を認めず集団への奉仕と没入とを最高の価値基準

組織メンバー間の間柄を重視 いざというときに意思決定が遅れる：

組織目標、目標達成手段の合理的、体系的形成ではない

チームプレーが下手

摩擦回避を重視するあまり威圧的なボスが生まれ暴力的な属人的組織支配が確立するケースがある

日本の組織では指導者の質が重要

異分子の排除、独創性の軽視 太平洋戦争中の例

海軍： 井上成美中将 1941 航空兵力の充実、海上護衛兵力の増強、南方島嶼の守備強化を主張

陸軍： 八原博通高級参謀 沖縄決戦時に戦略持久（自暴自棄の玉砕ではなく）本土決戦の為 時間稼ぎ敵の消耗を図る

真珠湾攻撃： 多くの反対のなか山本五十六連合艦隊司令長官だからできたのではないか

日常の自転：打ち捨てられる新たな経験（山本七平による）

下級将校から見ると摩擦を避けるため定型化されて固定化された機械的な事が多くなり思考停止の組織運営になった。日本の攻撃方法はワンパターンだった。

米軍は真珠湾奇襲で多大なダメージを受け、すぐにタスクフォースを組織、敗因と対応策を検討、空母を中心に 1.5Km の円上、戦艦、巡洋艦を 9 隻配置する

輪形陣対空防衛システムのアイデアを出し、珊瑚礁海戦で試し失敗に改良を加え、ミッドウェー海戦で大勝利に結び付け一大転機になった。

日本海軍はこの敗戦に対し本来ならば研究会をすべきなのだが、皆十分に反省しており、

今更 屍に鞭うつ必要が無いと考えた。敗戦の事実も国民はおろか陸軍まで隠蔽した。

横行する縦割り

組織の中心が消えて、縦割り割拠主義セクショナリズムが横行：

1907 (M40) の帝国国防方針も仮想敵国の設定が陸海両軍で調整できず両論併記になった：陸軍はロシア、海軍は対米で装備、人材育成等を行い中途半端な状況で太平洋戦争へ突入した

1940 (S15) 山下奉文中将の独伊に国防機構一元化の調査団を派遣したが遅きに失した東条英機首相は史上最大の空母決戦であったマリアナ沖海戦敗戦し絶対国防権で諸島を失うも、事実を国民に知らせるべきとの意見もあったが彼が虚偽の大本営発表をさせた。

対照的に英国の北アフリカ戦線トブルクの戦いを独ロンメル急襲で大敗北したがチャーチルは議会で赤裸々に状況を報告して議会信頼をとりもどした

主義の壁

「何々主義」というお題目にとられる：一度これが確立すると金科玉条になり状況の変化があっても愚直に守られる

海軍の例： 艦隊決戦主義 日露戦争時は当たり前であったが、1934 (S9) 海戦要務令最後の改定でも、その後航空機、潜水艦の性能発展にも拘らず補助機能しか与えられなかった

不祥事に対する甘い処分

仲間内で摩擦をさけるため、人事が緩む

例：1931 3月事件 少壮将校のクーデター未遂事件： 国家主義者大川周明 (45歳) の責任とし軍関係者の処分無し

1932 (S7) 5.15 事件 犬養首相暗殺 軍関係者 比較的軽い禁固刑

1936 (S11) 2.26 事件 当初軍事参議官 真崎大将 陸軍大臣告示で好意的 昭和天皇は断固鎮圧の意志 軍律違反事件としては唯一厳罰

1939 ノモハン事件 首謀者 辻政信少佐 (当時 36歳) 左遷のみ部下に対する処分が甘くなると指導者に対する責任追及もあまくなり、作戦や統帥についても追及がされず敗因究明が不十分：ミッドウェー海戦

大きな声に圧倒される精神構造の反映から、結果よりも心情や動機を重視する人事になりがち：積極論者が甘やかされ、自重論者が厳しい追及がされる傾向

貫かれない能力主義

仲間意識の深化が悪平等的発想を強め、適材適所や抜擢人事が行われなくなる

組織構成員の士気維持には、能力に応じた公平な人事：

平時： 皆が納得する人事： 軍事教育時の成績を最重視、教育経験に置いた年功序列人事

有事： 個々人の能力を実戦で見極めて行う 米：ニッミツ太平洋司令官
ルーズベルト大統領による大抜擢：ミッドウェー海戦大勝利

独： ロンメル元帥：大佐
より昇進

日本陸海軍： 平時の年功序列人事で開戦時 連隊長クラスでも実績があつても少将がやっとな

戦死時には二階級特進： 欧米にはない制度

踊り手の登場

1920 年代末から満州権益確保、北伐 満州国建国（1932）日華事変（1937-）等の、国内でも世界恐慌、農村疲弊、政党、官僚財閥、重臣排除を夢見て

中堅幕僚、青年将校の暴発が始まる

統帥権の独立、軍部大臣現役武官制度を武器として異なる見解を有する人間を沈黙させ自分達の意見をとおした

包容力、度量という上司の態度が増長させ幕僚の勢力を増大させ独断に陥る

戦史が無かった

日露戦の公式戦史である「日露戦史」1906 大山巖参謀長編纂綱領により存命中の將軍達に気兼ねして失敗の実態を覆い隠していると司馬遼太郎も指摘

綱領記述禁止例： 作戦各団体間意志の衝突の類-理由：内情暴露の為

高等司令部幕僚の執務の真相-理由：勤務上の機密

兵站 食料、弾薬、輸送力欠乏：今後の作戦活動、準備不足の暴露

は好ましくない

率直な記録の方が後世に伝うべき内容ではないか

白兵銃剣主義のドグマ：日露戦の教訓としての 刀、銃剣による肉薄戦重視思想

実際奉天会戦時は兵器質、量で劣っていたわけではなく、機関銃活用重視等では世界的に進んでいた：最後の雌雄を決するのが白兵戦

203 高地攻撃でも日本兵は類まれな勇敢さを発揮したが、ロシア側もひるむ兵を斬る士官もいて互角との見方もあった

1907 歩兵操典：結果として白兵戦重視と攻撃精神の涵養： ロジックの転換 精神力の重要性強調：徴集兵の大増員も必要の理由か

第一次世界大戦を経て、経済力、物理的な戦争遂行能力の劣る日本が欧米列強に伍してゆくには精神力しかないという論理いきついた

繰り返さいために

第二次世界大戦の実体験が風化しつつあり、日本は軍国主義に染まり侵略戦争を仕掛け物量に負けたという単純イメージ

日露戦争後の自信過剰が一つの要因、平和主義というお題目が重なり我々が思考停止になっていないか

論ずべきはなぜ転落した **変化の要因とメカニズム**を知ることが重要

